The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈傍聴記〉 公開ワークショップ傍聴記
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2008, 91, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈傍聴記〉

公開ワークショップ傍聴記

飯倉洋一

公開ワークショップの傍聴記を書くように命ぜられたが、すでに半年以上を経過したこととて、内容はほとんど忘却の彼方へと去り、資料も手元に見当たらない、いや、告白すれば失くしてしまっていた。これでは、とても任を果たせないナと思っていたところ、懇切にも全ての資料および質疑応答の録音が、主催者側から提供された。ありがたいことである。だが、もう逃れられない。

ではどう書くか。「初めての試み」「自主的に取り組んできた学生たちの意欲」「興味深い発表内容」「意義ある質疑応答」「会場の盛り上がり」「充足感」…とお定まりの美辞麗句を並べてもよい。決して嘘ではない。実際当時の録音を聞くと、私自身が発言に際して「興味深くうかがいました」と前置きを述べているのだ。聴衆も午前中から多かった。公開ワークショップは大成功であり、大いなる成果を収めたのである。とはいえ、傍聴記を私に頼む以上、そういう褒詞の列挙を期待されているわけでもなかろう。そこで、その場で感じたことを、なるべく率直に言葉にしてみようと思う。

面白かったことは確かである。すこし興奮もした。しかし、一部の発表・質疑応答は正直申し上げて少しだけ退屈だった。これは録音を聞いてあらためてそう感じた。もちろんその理由は、私の興味の範囲が狭く、あるいは理解が及んでいないからであり、公開ワークショップをめざして何度も積み重ねられてきた研究会を覗くこともなく、会話文と地の文というテーマを自分なりに受け止めて予習をするということもしていない私の責任であろう。だが、そういう当然の自己批判はこの際、棚上げする。開き直っていえば、私のような怠惰な聴衆を覚醒させ、前のめりにさせるような、圧倒的なパフォーマンスが会場に満ち満ちていたとは、残念ながらいえなかった。

院生による報告および発表は、浜田泰彦（近世文学）、黒木邦彦（国語学）、鳩野恵介（国語学）の三氏であった。浜田氏は、発表の契機となったと思われる浜田啓介氏の文体分類概念を用い、

多くの院生の協力に基づき、古代から近代までの用例を集めた調査分析を発表した。黒木氏は中古和文を対象に、会話文と地の文の境界のあいまいさに関し、これをどのように把握すべきかの試案を示そうとした。鳩野氏は、明治以後の文学テクストを主な考察対象に会話文を特立させる符号を細かく調査し、その分析を行った。いずれも、語学・文学の垣根を取りはらい、問題意識を共有しようとする点で共通しており勉強にもなった。しかし、なぜ「会話文」と「地の文」を問題にしなければならないのか、それが伝わらない。各自の発表が相互に絡み合うような場が醸成されていくような展開ではなかったと私は感じた。バランスよく三本をそろえたのは結構だが、ワークショップなのだから、相互の発表をゆさぶったり、それぞれに共振するところがクローズアップされるような形を期待していた。

ゲストの加藤昌嘉氏と斎藤理生氏の基調報告。加藤氏は鉤括弧が付されるはずの所に生ずる異文に注目することで、平安和文の気脈を感受し、新たな整定本文と現代語訳を提示しようとする。また、本文異同という横軸をとりいれた横揺れする文学史を構想する。斎藤氏は近代文学における会話文引用の形式、地の文と会話文の区別の実例をいくつかあげて、読みに結び付けるさまざまな問題を提起した。

五人の報告の中で、加藤氏の問題意識の鮮烈さが印象的であったが、総合的に言えば、問題意識はそれぞれに異なっており、パネリストの相互応酬においてもかみ合っていなかった印象はぬぐえない。

その後、フロアにも質問・意見が求められて、数名の発言があり、会話文と地の文をめぐる多様な関心が浮かび上がってきた。これを聞くのは実に楽しかった。しかし、単発的にホームランの出る試合を見ているようで、それは質問者のもともと持つセンスが光るものであって、ワークショップの企画がもたらしたものとは言えなかったのではないか。

仄聞するところによると、このワークショップのテーマは、浜田啓介氏の読本文体論の講演と、加藤昌嘉氏の論文「「と」の気脈」に触発されたところ大だという。結局ワークショップ全体を聞いて私の印象に残ったのも、浜田啓介氏の小説様式論確立へのすさまじい意欲と、加藤昌嘉氏の読みの方法論確立への独創的感性だったのだ。だからよかったのか、だから物足りなかったのか。

いや、外野はなんとでも言える。この企画立案から実行まで、助言者として支えて来られた荒木浩先生をはじめ、関わったすべての方々に感謝申し上げたい。なにしろ、ゼロからここまでやるのは大変だということは、私の乏しい経験からでも察することが出来る。その割に辛口だったのは、次のワークショップ開催を、実はひそかに期待しているからに他ならない。

（いいくら・よういち　本学大学院教授）